

《花之丞の墓》

これは藩政時代のことである。住吉野に、花之丞という変わった男が住んでいた。その名の通り、

全くの花気狂で、昨日は北山に、今日は南の丘にと、桜の木を求めて歩きまわり、住吉神社の馬場に



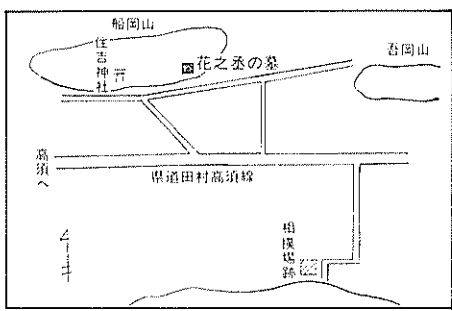
船岡山のふもとにひっそり眠る花之丞とその妻の墓

植えて、その成長を楽しみにしていた。そしていつしか、家の仕事も忘れてしまつて、桜に生命をかけた、その成長を喜び、花の咲くのを待たねた。

冬が去り、春がきて、花が咲きはじけると、村の人々はその美しさにひかれて、花見の宴を張るのであったが、花之丞は、それが何よりもうれしかった。

ある年の春のことである。今年も例年になく、立派に花を咲かせてくれた。喜んだ花之丞は、どうしたか、花壇に煙るある日の朝、愛する花に抱かれて倒れていた。花を愛して数十年、愛する花にうもれて病に倒れたので、さぞかし本望だったろう。

お墓は船岡山の東側に、南面して立っている。正面には、文字も



あきやかに、武市花之丞墓と刻まれている。右側には、文政六年（一八二五）九月六日、同じく左側には、享年五十九の文字が読みとられる。

その墓とならんで左側には、文化十四年（一八一七）に四十九歳で没した、花之丞の妻の墓が目にはいる。

花之丞が、生命をかけて育てた住吉神社の桜の木も、今では枯れて、昔の面影は見られない。名所としての住吉野の桜を、今一度再現して、花之丞の霊を慰めてやりたいものである。

地元のかたのお話

花之丞という名前は、山内の殿様からいただいたもので、本当の名前は、武市家の系図で調べてみましたが定かではありません。

花之丞は仕事も忘れ毎日、あちこちの山へ行つては山桜を取つて来て植へ、三町もある住吉神社の馬場は春にもなると桜の花が満開だったそうです。そして、いつも「私が死んだら、桜のもとで肥になる」と言つて、桜の成長を心から楽しみにしていました。

まだ、私たちの子どものころには、花之丞が植えたと思われる一かかもある大きな桜の木が、七十八本は残っていたことを記憶しています。

原稿募集

一方、船岡山にある住吉神社には、次のような話が残っています。何でも山内公の側室の子ともが、ほうそうにかかり、この神社に病退散を祈願しました。するとたちどころに、子どものほうそうは治り、山内公はその霊験にたいへん感心し絵馬を奉納したそうで、今でもその絵馬は大切に保存されています。

また藩政時代、泉道の南側にある向山のふもとには、山の斜面を見物席にした大きな相撲場がありました。そして、その見物席の一段高いところに、山内公が陣幕を張つて大相撲を見学したと言われている。石垣で囲まれたところが残っています。しかし、最近では草木が茂り見る影もなく淋しい限りです。

（以上、武市澄江さん、亮一さん、正儀さんの三人のかたにお話を伺いました）

広報なんこくでは、あなたの投稿をお待ちしています。

地域の伝説、昔話、隠れた文化財などありましたら、気軽に投稿してください。また連絡ください。取材に伺います。（☎③2111内線407 企画広報係まで）

普及所から⑬

4月の家庭菜園にはこんな野菜を

春は家庭菜園の作業が忙しくなる時期です。今回は、四月には種蒔付けができる野菜について紹介しましょう。

◎春ダイコン（四月早生、耐病総太り）

春まきダイコンは、一二度以下の低温でトウ立ちしやすいので、トウ立ちにくい品種を選びます。耕土の深い、小石のない排水の良いほ場を選び、種まきの一週間前に、一畝当たり苦土石灰十、リン酸、カリ各成分二を施し、よく土と混和しておきます。

畦幅二〇、株間二五、条間三五の二条まきとし、ポリマ

ルチをします。一カ所五、六粒まきとし、覆土は一程度とします。間引きは、子葉展開時、本葉三枚時、本葉六枚時の三回行い、間引き後は追肥と土寄せをします。種まき後五十一六十日で収穫ができます。

◎スイートコーン（ハニーバンタム、ゼリーバンタム）

四月上旬に、畦幅一三五、株間二五、条間四五の二条まきとします。元肥は、一畝当たりチツソ、リン酸、カリ各成分二とし、一カ

命がけの立ち合い

吉本其梅（植田）

菊が栄えて葉が枯れる。西に響の音がする。その頃服岩の在に宮相撲の花形力士で、藤吾と云う若者がいた。

ある冬の寒い日、高知で用を足して帰途、下知で一枚茶碗の酒。身を切るような北風を斜に受けて、寒さをしのぐはおかぶりに懷手、うつむき加減の急ぎ足で、通りかかった国分川の浦原堤。ちょうどその時、向こうから一人の侍が来るのに気づかなかつた。すれ違いざまに、どすんと突き当たったからさあ大

変。「無礼者、それへ直れ」と、太刀に反をうたせて詰め寄った。逃れる術もあるまいかと思いが、大地に手をついて謝ったが聞かばこそ、刀の鯉口をぶつり切つて裏と表の目釘をしめし、相手はたがが土首姓、逃がす恐れもあるまいと、ゆつくりと刀の柄に手をかけようとしたその時だった。

川の中で魚でも跳ねたのか、ぽちんと大きな音がした。侍がその方へ振り向いた。その瞬間、どうせ斬られる命ならのかさるかの一番勝負、相撲の立ち合いそのま

まに、目にも留まらぬ早業で侍の胸板へ命がけでぶつかった。

不意をつかれた侍は、タカデタマルカエライモン、堤のウツソをつき破つて肌も凍る国分川の中へ、マンノケタに落ち込んだ。見届けするすきもあらばこそ、命あつての物種と暗やみせまる国分川の堤を命からがら逃げだした。

後ろの方で、「百姓侍でー」と言う声を聞いたのは、もう安全圏外へ逃げのびてからだった。

それから何事もなかったように、永い月日が流れた。恐ろしさと自慢が五分と五分。人に言うなよと口止めしながらも、知人にぼつぼつこの話を始めたのは、士農工商の制度も消えた平和な明治の

世であつた。昔まつこうさるまつこう。

私も幼年のころ、この老人を見たことがあります。こちんまりとした好意で、若いころは柳瀬、馬路や不寒冬と、当時有名な官山を渡り歩いたベテラン植夫であつたそうです。

注：響「たづなをつけるため馬の口に含ませる金具。鯉口「刀のさや口。目釘「刀の柄と刀身とを刺し止める釘。ウツソ「草木が茂り魚のすみかとなつてい場所。マンノケタ「後ろ向き。好好爺「人のよいおじいさん。官山「国分川。植夫「木こり。



植するのが安全です。〔南国農業改良普及所〕